

1. コラム：時代を読む地図のつくり方

(Japa 日本専門家活動協会 代表理事 芝原靖典)

社会の変化を読む作業は、もはや個別ニュースを追うだけでは足りない。気候変動、人口減少、AI の進展、地政学的緊張、地域の衰退、孤独の拡大等、これらはばらばらの問題ではなく、同じ社会システムの別々の断面として現れている。長年「社会システム」を生業としてきた者からすると、社会を動かす要素は「主体・価値観（個人・集団・組織）」「技術（要素技術・技術システム）」「仕組み（法制度・ルール・慣習等）」の3つと云える。この3つが噛み合うとき社会は安定するが、時代が変わると実態と仕組みのズレが生まれる。AI が普及したのに、働き方や意識が変わったのに変わらない。現在の混乱の多くはこのズレから説明できる。

では、なぜ時代遅れの仕組みは残り続けるのか。これは怠慢ではない。仕組みには「昔うまくいった成功体験」が深く埋め込まれており、加えて仕組みをつくる立場にある人の多くは既存制度の受益者でもある。社会には慣性がある。巨大な船が急には方向転換できないのと同じである。しかし社会は外部から大きな衝撃が来たとき変わる。コロナ禍はその典型で、リモートワーク・オンライン授業・オンライン診療・行政 DX 推進と、変えられなかった仕組みが一気に再設計を迫られた。外圧は古い仕組みと新しい現実のズレを強制的に可視化するのである。

社会の変化は「良い技術が出たから変わる」という単純な話ではない。技術的に可能なのに導入されないものがあり、社会的には望ましくなくても仕組み化されるものもある。その差を生み出すのが利害・権力・資源配分の力学である。誰が利益を得て誰がコストを負担し、誰に決定権があるのか。この問いなしに社会変化の方向は読めない。制度変化論のノースは、過去の選択が未来を縛る「パス依存性」を重視した。既得権（利益と負担の配分）や評価基準が変わらなければ変更は形だけで終わる。仕組み（制度等）の背後には歴史と配分の構造がある。

社会にかかる外圧は一括りにできない。長期ストレスとは少子高齢化・気候変動のようにじわじわ効く圧力で、気づいたときには社会の前提そのものが変わっている。急性ショックとは災害・感染症パンデミック・金融危機のように突然やってくる衝撃で、平時には見えにくかった脆弱性を一気に表面化させる。対応戦略が異なるため、この区別は重要である。長期ストレスにはじわじわ適応し、急性ショックには素早く立て直す力が求められる。新しい時代の兆しはこうした衝撃の後に生まれる「端っこ・縁(ふち)」の実験から始まることが多い。その先にあるのがレジリエンス→持続的イノベーション→社会システムリデザインという方向性である。

社会の現状を理解するとは、個別のニュースを追うだけでなく、個別の制度や技術を知ることでもない。それらの関係がどうズレ、どう再編されつつあるかを見ることにほかならない。その見取り図として、軸 1 [時代環境 (外部性)]、軸 2 [時代構造 (社会システムの内部構造)]、軸 3 [日本・地方創生 (社会・地域課題)]、軸 4 [主体の最小単位である個人の孤独・孤立・Well-being]、軸 5 [社会システム設計・思惟論] という 5 つの軸が役立つ。この 5 軸で整理すると、バラバラに見えたニュースがひとつながりの時代の流れとして見えてくる。

状況や構造変化に応じて、「問いを立て直す柔軟なフレーム」が重要である。この 5 軸の地図を手に入れたとき「自分はどこにいるか」「今から何を始められるか」という問いが生まれる。

補：本コラムの詳細は <https://shikumi-gunzo.hatenablog.com/>、バックナンバーは <https://www.japa.fellowlink.jp/column> に掲載